一日一想

鹿児島・小さな旅（上）

松田　一一郎

11月上旬、若い友人10人に手を引かれるようにして、いい旅に出た。2泊3日である。

1日目。庄内空港第1便で出発、羽田経由で鹿児島空港に到着したのは11時30分。あらかじめチャーターしておいた中型バスに、ゆったりと坐る。気さくで誠実そうな運転手さんは、年のころ50歳くらいか。これから3日間のお付合いだ。

きょうの最初の目的地は霧島神宮だから、バスは北東方向に走っているはずだ。野中や山あいの道を抜けた所で、スピードを落とした運転手さんが言う、「前方やや右手に見えるのが、高千穂の峰ですよ。」

写真でしか見たことのない高千穂の峰が、今、目の先にある。日の光をいっぱいに浴びて朱色に染まり、大鳥が翼を広げたようにそびえ立つその姿は、とても美しい。そして、実に神々しい。これは、紛れもなく神話の世界だ。

『古事記』によれば、天空世界に在るアマテラスの指図に従って、その孫ニニギが地上世界に降り立った。そこが、「筑紫の日向の高千穂のくじふる（霊妙な）たけ（岳・峰）」である。

他方、『日本書紀』には「日向の襲の高千穂」と記述されている。「襲」とは熊襲（隅襲）のことで、かつて今の鹿児島県大隅半島の北部から薩摩半島の北部にかけて居住していた種族である。また「日向の国」は、日に向かって光の射す国の呼称であった。奈良時代初期、日向国の一部と大隅半島による大隅国が制定されると、襲はその地域名となる。現在、鹿児島県曽於市（以前は曽於郡）に名をとどめる、という。

こう見てくると、『日本書紀』に記されている言葉は、「かつて日向に属し、現在は大隅の襲にある高千穂」と解されるだろう。とすれば、霊峰高千穂、いまだに噴煙を上げる新燃岳、第一峰韓国岳などを擁する霧島連山を、大まかに「天孫降下」の峰とする説も肯けようか。

いや、しかし、ことは天空の世界が存在する神話である。その中のハナシを今日的な事実や実態で割り切ろうとしても、それは到底無理であり、不可能であろう。

蔵王山は、ザオウサンでもザオウザンでも、どちらでもよい、という裁定が国土地理院から出された。高千穂論争も、この程度の決着を図ってもいい時期だろうと思っている。

高千穂の峰に別れを告げて、霧島神宮に向かう。高千穂の懐に抱かれるようにその神社は建っていたが、思ったよりも参拝客が少なく、境内は静寂であった。

祭神は、件のニニギである。本宮は、もともと山のずっと上の方にあったが、噴火によって2度焼失に見舞われ、麓に下ろされたという。

神社を後にするとき、一時、あの広大明澄なアマテラスの伊勢神宮との暗翳差は、いったいどこから来ているのだろうと、とりとめのないことを思ったりしていた。（鶴岡市青柳町）

一日一想

鹿児島・小さな旅（中）

松田　一一郎

2日目。目的地はきのうと逆の方向、薩摩半島南部の知覧である。

江戸幕府は一国一城を原則として諸藩に目を光らせていたが、なぜか薩摩藩は100以上の支城を持っていた。知覧は、支城が築かれた町の一つである。そういう訳で「武家屋敷群」が町の一画に保存されており、10余りの屋敷を見学することができる。1メートルばかりの石垣の上に生垣や黒い板塀が廻され、中にひっそりと佇む家屋と地味な枯山水の小庭は、それなりに風情があった。

だが、私は〝心ここにあらず〟の状態で、誰よりも先にバスに戻っていた。「知覧旧特攻基地」。今まで新聞記事や書物の文章を読むだけで、わずかに知識を得ていた所だ。そこがまもなく自分の目で確かめられ、自分の頭で感じ考えられると思うと、気持ちが高ぶってくる。

知覧の町は小さいから、バスはすぐ野原の中の道に出て、とある交差点で一時停止。そのときの運転手さんの言葉は、忘れられない。「ここを渡ると、その先の道路は、特攻機が飛び立って行った滑走路です。このバスは、少しの間、滑走路の上を走ります。」この滑走路を、再び帰還することのない、日本最後の地として、南の空に飛び去って行った若者たち。彼らの心情は、どんなものであったろうか。先ほどまで賑やかだった車内の話し声は、今はない。

滑走路だった道路を途中で左に折れ、バスは知覧特攻平和会館の駐車場に入った。

平和会館は、私たちに語りかける。

1945年（昭和20年）3月26日、アメリカ軍が沖縄慶良間列島に上陸した。その日から、知覧を主基地として、都城、鹿屋、熊本、台湾など複数の基地を飛び立った「隼」「疾風」による体当たり攻撃が始まった。そして、1036名の若い命が、沖縄の空と海に散った――

広い展示場には、隊員たちの遺影、日記、遺書、遺品、絶筆などが、所狭しと並べられている。それらを丹念に見ていると、隊員たちへの心情は強く動いても、足は止まったままで動かない。一日中でもこの場に居たい気持ちは強いけれども、時間は限られている。その時間に追い立てられるように足を進めると、一隅のVTR室で何か映像が流れている。見ると、富屋食堂の女主人・鳥濱トメさんが若い特攻隊員の思い出を語っているところだった。トメさんの店は基地近くにあった軍指定の食堂で、彼女は隊員たちから「おばさん」「おかあさん」と呼ばれ慕われていたという。トメさんの思い出話としては「ホタル」の話が有名で、高岡修氏編集の資料集にも収録されている。それを簡単に紹介しておきたい。

ある日の晩、20歳になったばかりの宮川三郎隊員が、トメさんの食堂にやって来た。

「おばさん、私は明日出撃します。でも、かならず帰って来ます。」

「どうやって帰って来るの？」

「ホタルになって帰って来ます。」

次の日の夜、富屋食堂の裏手を流れる小川に大きなホタルが飛んで来て、白い花に止まった。

「このホタルは、宮川のサブちゃんですよ。」

トメさんはそう言って、みんなといっしょに「同期の桜」を歌った――

この「ホタル」の話は、のちに高倉健主演の映画にもなった。ただし、内容は大きく脚色されて長いストーリーになる。若い特攻隊員は韓国出身者として設定され、その恋人役は田中裕子だったと思う。

集合時間が来て特攻平和会館の外に出ると、すぐ近くに特攻隊員の銅像が建っていた。若々しく澄んだ眼差しの先には、薩摩半島最南端の、秀麗にして重厚な開聞岳がある。基地を飛び立った若者たちは、まず開聞岳を目指し、敬礼を捧げてから死地に向かったという。

平和を望みながらも若い命を捨てなければならなかった痛ましい現実が、73年前の日本にはあった。そのことはいつまでも忘れないでいたいと、改めて強く思ったことである。

バスは知覧を後にして動き始める。予定では、これから鹿児島市内に戻るはずなのだが、逆に南に向かって走って行く。薩摩半島最南端にある開聞岳を私たちに見せたいという運転手さんの配慮なのだろう。

山は、少し遠くから眺めた方がいい。開聞岳は1000メートル足らずの山だが、まわりに高い山がないのでそびえ立っている感じだ。きのう眺めた高千穂の峰と同じように、美しい姿をしている。開聞岳に別れ、もう一度知覧に戻り、鹿児島に向かうのだが、旧特攻基地を迂回する道路に入ったとき、見慣れない光景に出合った。道路の両側に、石灯籠が整然と並んで建っているのだ。高さ1メートルほどの細身の灯籠だが、白い色で清らかな感じがする。建っている所は、畑や野原の前だったり、民家の前だったりする。運転手さんの話を聞こう。「この灯籠は、終戦後、地域住民の方々が戦場に散った若い特攻隊員たちの霊を慰めようと、毎年少しずつ建てて数をふやしていったそうです。そのうち知覧を訪れた方々の共感を呼び、全国各地から寄贈の申込みがあって、現在は戦死者1036名に対して、灯籠の数は1300基を超えているそうです。」

お盆には、この灯籠に火がともされるのだろうか。そんな有様も含めて、知覧の灯籠が立ち並ぶ風景をしっかりと脳裏に刻みつけておきたいと思った。

鹿児島市内に帰ってきて、藩主の別邸「仙巌園」を見た。鹿児島湾を池に、桜島を中の島に見立てた壮大にして珍奇な趣向への感懐は、知覧で得た感動に遥かに及ばなかった。このことは、正直に白状しなければならない。

（鶴岡市青柳町）

一日一想

鹿児島・小さな旅（下）

松田　一一郎

今日は、旅の3日目。しめくくりの日だ。南洲神社、南洲墓地、西郷南洲顕彰館などを巡る予定になっている。

折しも〝明治150年〟、NHK大河ドラマは〝西郷どん〟。そのためか、鹿児島市内にもともとたくさんある西郷隆盛の像に加えて、西郷関係の幟や看板があちこちに立ち並ぶ。

「右手に大久保利通の像が見えてきましたよ。」と運転手さん。見ると、長髪、りっぱな髭をたくわえ、洋服を着こなした痩身の大久保像である。運転手さんは一つの思い出話を語り出す。

「私が子どものころの話ですが…。学校の先生が、よく言っていましたよ。みんな西郷さんのような人間になれよ。決して、決して大久保のような人間にはなるなよ、とですね。」

奇しくも同じ町内に生まれ、労苦を共にしながら力を合わせて維新を成し遂げた西郷と大久保。しかし、朝鮮問題いわゆる征韓論で意見を異にした一方は下野し、一方は政府中枢の要人として政権内に残る。やがて起きた西南戦争で二人は完全に敵対し、片方は戦いに敗れて死に、片方は勝利者となる。こういう構図の中で、鹿児島の人々は、西郷を節に殉じた偉人、いや神として敬い、大久保を信ずるに価しない悪人と決めつけたのだろうか。

私自身はどうか。残念ながら、私は幕末から明治維新にかけて活動した人物の評価はできないでいる。評価できるほどの知識も能力もないからである。

吉田松陰も分からない。佐久間象山も分からない。清河八郎も分からない。大久保利通も分からない。西郷隆盛も分からない。吉田は獄死した。西郷は部下に自らの首を刎ねさせた。佐久間、清河、大久保は暗殺された。彼らの死を、彼らの生きざまの中から、どう導き出していくべきか、私には分からない。

そして、さらに私の頭の中を混乱させることが、「西郷南洲顕彰館」の中にあった。この館は、展示した西郷ゆかりの品々をたどりながら、その足跡と思想を学ぶことができる展示館であり、研修施設である。

私は館内を見学してまわりながら、はじめて目にする言葉に出会った。「遣韓論」という言葉である。「征韓論」なら承知している。当時日本政府との修交を拒否していた韓＝朝鮮を征伐すべし、という論である。武闘主義の考え方だ。しかるに、「遣韓論」も西郷が唱えたもので、自ら全権大使となって使者を朝鮮に派遣し、話し合いで問題を解決しよう、とする論である。いわば、平和主義である。西郷がいずれの論に立ったにせよ、岩倉具視、大久保利通に支持されず、下野したわけである。

この「遣韓論」が事実として存在したのかどうか、私には分からない。この旅の中で、初めて見知った言葉であり、私の頭の中を混乱させた言葉なのだから。

この「分からない」ことの中に収穫があるとすれば、それは、これから幕末期と維新期のことをもっと勉強しなければならないという気が、少しばかり起きたことである。

◇　◇

いちばん後になって、自分で自分に宿題を課することになってしまったが、それも含めて一日一日深い想いを与えてもらった旅だった。

そして、心配もしなければならない、世話も焼かなければならない年寄りを、遠く鹿児島の地まで連れ出してくれた若い友人たちの優しい気持ちに、「ありがとう」の想いが素直に湧いてきた旅でもあった。

（鶴岡市青柳町）